

氏 名	しの はら もと あき 篠 原 資 明
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	論 文 博 第 509 号
学位授与の日付	平 成 18 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	トランスエスティーク ——芸術の交通論

論文調査委員	(主 査) 教 授 岩 城 見 一	教 授 伊 藤 邦 武	教 授 小 林 道 夫
--------	----------------------	-------------	-------------

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、芸術の「交通論」と、その前提となる美学史的研究とから構成されている。ここでいう交通論とは、論者により独自に提唱された方法論であり、また美学史的研究とは、現代の問題への論究を含む広義のそれをいう。ちなみに、論文タイトルの「トランスエスティーク」とは、さまざまな間（あいだ）を横断する美学という意味であり、本論文では、芸術の交通論とはほぼ同義で用いられている。

本論文は「交通論」の視点から、間（あいだ）で織りなされる交通様態に着目する。その様態は、「単交通」、「双交通」、「反交通」、「異交通」の四つに分けられる。「単交通」とは、一方通行的な様態、「双交通」とは、双方向的な交通様態、「反交通」とは、交通が遮断された様態、「異交通」とは、たがいの異質性を保持しつつ、さらなる異質性を生成させる様態をいう。

第1章「芸術の交通論」では、芸術の交通論の基本的立場が提示される。論者は、芸術的世界を構成する「作り手」、「作品」、「受け手」という三項の間に着目し、それらの間の交通様態を探ろうとする。まず、単交通として、クローチェの美学に見られる形の相のもとでの交通、双交通として、レヴィ＝ストロースの記号論的芸術論に端的に見られる、記号の相のもとでの交通が取り出され、それぞれの様態に対応する美学として、「形の理論」と「記号の理論」が当てられるが、いずれの立場も不十分なものとされる。作り手と作品と受け手との間には時間が介在し、現在を位相とする作品にとり、作り手は過去に、受け手は未来に位置するからである。これら過去・現在・未来の間には、一義的に決定できない「過剰」が存在し、過剰の交通こそ、論者の言う「異交通」にほかならない。そのような立場から、芸術は、「過剰の交通装置」、すなわち異交通を中心とする交通装置として規定される。

第2章「芸術とディスクリール」では、芸術と言語との間が、検討対象となる。芸術と言語を同一視したベネデット・クローチェの立場と、芸術と言語を相容れないものとしたアンリ・ベルクソンの立場の対比からはじまり、作品を語る言語、作品を取りまく言語のありようが分析される。そして、作り手と作品と受け手の間の過剰、すなわち、痕跡過剰・感性過剰・解釈過剰という過剰の構制の中で、芸術と言語の間が検討されることになる。これは「過去の過剰」、「現在の過剰」、「未来の過剰」と言い換えることができる。現在の一つの形成物や人間の行為は、多様な過去の可能性から選ばれたものであり、これによってそのときに選択されなかった過剰な過去の可能性に関係づけられており、また現在も、意識の前景に出ていない諸々の過剰に囲まれており、さらに作品解釈は多くの可能性に開かれた予測不能なものだからである。このような三つの過剰に関わり、人間の開かれた可能性を提示する作用が、とりわけ芸術に特有の存在理由として把握されている。

第3章「多様体の交通論」では、異交通の理論の母胎となったベルクソンの美学が扱われる。異交通が、異質性を保持しつつ、さらなる異質性を生成させるものだとするれば、ベルクソンのいう真の時間としての「持続」とは、異交通そのものといえるからである。そのような立場から論者は、ベルクソン美学を、持続という質的多様体における交通を探るものとして捉え直し、そこにひそむ「芸術の二源泉」というテーマを、ヴェールを解く方向とヴェールを織る方向として取り出し、その意味を明らかにしようとする。論者によれば、前者の方向には、知覚の拡大と創造的情動が連なり、後者の方向には、笑

いと仮構機能が連なる。

第4章「芸術、その開かれと閉され」では、単交通の理論としての形の理論、双交通の理論としての記号論が、20世紀イタリアの代表的な理論家たちをとおして検討される。

まず、形の理論として、クローチェとルイジ・パレイゾンの美学が俎上にのせられる。ただ、パレイゾンによれば、クローチェ美学では受け手の活動がしかるべき評価を受けていないという。その点を踏まえつつ、パレイゾンは、受け手の活動を無限の解釈過程に開かれたものとして捉え直そうとする。これに対して、パレイゾン美学に多くを学んだウンベルト・エーコは、受け手の参加を要請するアヴァンギャルドの作品を「開かれた作品」と呼び、そこに過剰な解釈への開かれを見ようとした。しかし、自らの記号論を体系化し展開する中で、その「開かれ」が、理想的な受け手への「閉され」と結びつかざるをえない事態を確認するはかなかった。なお、エーコの記号論の双交通的な側面については、参考論文として付した『エーコ』において詳しく論じられている。

以上の4章は、芸術の交通論の基本的な立場の提示と、各交通様態の思想史的な跡づけとに当てられ、第一部としてまとめられるのに対し、続く第二部の各章では、より現代的な問題ないしは思想が扱われる。

第5章「ポスト構造主義」では、論者はポスト構造主義の代表的哲学者であるジル・ドゥルーズの美学を検討することで、異交通の理論のより現代的なあり方を探ろうとする。

まず注目されるのは、ドゥルーズがカント美学から読みとった諸能力の不協和な協和というあり方である。この不協和な協和は、ドゥルーズにおいては、絵画論では視覚と触覚の間、映画論では視覚と聴覚の間のそれとして展開される、というのが論者の主張である。

論者によれば、ドゥルーズは、ベルクソン哲学から差異と反復の不可分性を読みとり、ニーチェを通過することで、差異と反復の一体性という独自の立場を築き上げていく。美学的に注目される第二点は、ブルースト論において、差異と反復の一体性が芸術の本質と見なされていることである。論者は、ブルースト論において、芸術が機械として論じられ、「欲望生産機械としての芸術」という見方が用意されていることを指摘する。

第6章「ポストモダンと芸術」では、1970年代の末から顕在化するポストモダンの問題が、ジャン＝フランソワ・リオタールとエーコによりながら、考察される。論者によれば、リオタールは、ポストモダンを大きな物語への不信によって定義する。これによって、モダンを特徴づける人類全体を導く大きな物語への信頼は失われたことになる。しかし、論者によれば、これによって芸術におけるアヴァンギャルドの死が語られているわけではなく、むしろ、リオタールにおいては、芸術はアヴァンギャルドとして、モダンを問い続けることでしか存続しえないと考えられている。論者は、そのような考えが、カントやバークの崇高論を読み直す中で練りあげられていくと考える。それによれば、崇高とは〈いま〉をめぐる問いにほかならない。論者はこれに対して、エーコにおいては、ポストモダンが「引用」のゲームとして捉えられ、アイロニカルな過去への再訪として、歴史全般に、ポストモダンの知の働きが押し広げられていく、と指摘する。

このように、ポストモダンをめぐる議論の揺れ動きを追いながら、論者はその根底に、過去と現在との間の不協和な協和、すなわち異交通を見ようとする。その先駆的な理論家として、ベルクソン、さらにはバロック時代のバルタサル・グラシアン（注）の現代的意味が考察されている。

第7章「毒と薬のトランスアート」では、ファルマコン装置としての芸術のありようが検討される。「ファルマコン」とは、薬と毒という両義性をもつ言葉であり、文字言語に関する議論においてジャック・デリダがプラトンを脱構築することで、クローズ・アップした用語である。この章では、プラトンとアリストテレス以来の議論のうちに、毒と薬の間の変質を探る試みがなされる。たとえば、モダニズムにとって毒であったはずの伝統やブルジョワ文明も、ポストモダニズムにとっては、毒ではなくなる。さらに、毒を隠蔽しながらも、毒の見かけを生産しさえするメディア状況も確認される。論者は、ポストモダンを通過しつつある現代の芸術は、既成のヒエラルキーも中心も前提しない差異による交通によって規定されるべきだとして、そのような芸術のありようを「トランスアート」と呼び、さまざまな間を横断するトランスアートは、メディア状況を踏まえつつ、毒と隣り合わせのあり方をも横断しなければならないと指摘する。

第8章「アヴァンギャルド以後をめぐる」では、アキッレ・ボニート・オリヴァによるトランスアヴァンギャルド論を検討しつつ、論者のトランスアート論の正当性の確認が試みられる。論者によれば、ボニート・オリヴァは、従来のア

ヴァンギヤルドがむやみに新しさを求めるあまりに一直線的な進化論におちいったのを批判し、多線的な展開を射程に置くトランスアヴァンギャルドを主唱したが、それは、モダンに対するポストモダンの主張とみごとにまでに対応する。論者はしかし、アヴァンギャルドが担っていた実験性を、トランスアヴァンギャルドが否定するとはみなさない。論者の理解では、問題は、アヴァンギャルドが直線的な時間モデルに依拠しすぎたことにあり、直線化されない間を横断することにこそ、「実験」の意味がある。それゆえ論者の提唱する「トランスアート」という語は、そのような横断性にこそ見合うものとされる。時間を直線化させない間とは、論者の言う「過剰性」あってこそその「間」だからである。

以上のとおり、本論文は、四つの交通様態の中でも異交通という様態に着目しつつ、さまざまな観点から、異交通装置としての芸術を論述しようとしたものである。

論文審査の結果の要旨

本論文は、芸術における「作り手」―「作品」―「受け手」の間の関係を、論者が提起する「交通論」の視点から考察するものである。「トランスエステティーク」は、この「交通論」を展開するための理論（美学）に付された名称である。ここではまず「交通論」の意義についてまとめ、それとの連関で他の話題を概観する。

論者は20世紀の芸術理論を批判的に検討し、それらに代わる「交通論」を提唱する。批判される理論の一方は、B・クローチェに代表される「形の理論」、他方は、C・レヴィ＝ストロースに代表される「記号論」である。「形の理論」は、「直観」自体に「表現」機能を見るが、同時にこれによって、作品は作り手の内的表現の「備忘録」にすぎないものになり、また「受け手」の解釈も、作り手の表現の追体験とされ、解釈の能動性（「交通」）が切り詰められる。また「記号論」は、作品―受け手の間に解釈「コード」を設定することで、相互の「交通」は確保するが、コードに重点を置くため、芸術の、コードを組み替えるダイナミックな側面は軽視される。

これらを批判し、論者は「交通」を、一方通行的な「単交通」、交通を遮断した「反交通」、相互交通のなされる「双交通」、そして異質なものの相互関係から新たな交通が絶えず生み出される「異交通」という、四つの様態に分ける。このような「交通論」の視点から見れば、先の「形の理論」は「単交通」、「記号論」は「双交通」とどまる。これに対して論者が重視するのは「異交通」である。このような交通様態の分類から分かるのは、論者の提起する「交通論」は、芸術論としての「美学」とどまるものではなく、社会理論も射程に入れた、経験全体に関する理論になるということである。

なお、論者が重視する「異交通」のための重要用語は、「間（あいだ）」と「過剰」である。「交通論」が「間」を重視することは言うまでもないが、より重要なのは「過剰」である。論者はこの概念を「交通論」の基礎に据え、さらにそこに過去（痕跡）、現在（感覚）、未来（予見、解釈）の三つの過剰を見出す。これらは、論者が自らの理論の基礎に置く、ベルクソンの時間論から読み取られたものである。ベルクソンによれば、私たちの日常的行動は特定の目的に拘束され、これが記憶、知覚、予見の枠組みになっている。このとき私たちは、選択されなかった過去（痕跡）、気づかれない現在（知覚）や予測不能な未来（解釈）の「過剰性」に囲まれながら、しかしそれに目をとめずに済ませている。このような、日常世界で捨象される三つの過剰を拾い上げ提示することが、芸術の重要な機能と見做され、芸術は「過剰の交通装置」として捉えられる。論者は、ベルクソンの芸術論のみか、G・ドゥルーズの知覚と記憶に関する理論も導入し、「ヴェールを織る」機能とそれを「解く」機能とを「芸術の二源泉」として取り出す。一方で芸術は宗教とともに、ヴェールを織ることで、社会の危機に対して、感情、知覚の次元での防衛機能を担い、他方で芸術は、言語に支えられた日常的行動において覆われた実在のヴェールを解いて、人間を実在へと向け、知覚を拡大させる機能をもつ。また論者によれば、芸術のこの両面を「技術」と「催眠術」として捉えたベルクソンは、以後「神秘的直観」を語り、持続を見出し知覚を拡大する芸術の機能を重視し、そのような世界へと人間を迎える、芸術における「香り」や「愛」を語る立場に至る。また先の「二源泉」は、芸術の「開かれ」と「閉ざされ」として捉え直される（第1～3章）。

次いで近現代芸術論、記号論の展開が概観され、最新の理論として、U・エーコの記号論が検討される。論者によれば、作品の「開かれ」と「閉ざされ」を論じるエーコは、能動的解釈を要請する新しい芸術を前者に、誰でも同じ結果を予想できる大衆芸術を後者に位置づけるが、同時に前者に関しては、「モデル読者」を設定することで作品の「閉ざされ」の側面を、また後者は恣意的理解を許す点で作品の「開かれ」の側面をも指摘し、そこに解釈の開閉の「美的弁証法」を見る。し

かし論者によれば、エーコは記号論の立場から「モデル読者」を設定するために、なお「双交通」の立場にとどまっている（第4章）。エーコに関しては副論文（『エーコ』）で論者の詳しい解釈が示されている。

第二部では、現代の「ポスト構造主義」と「ポストモダン」思想に考察が加えられる。ポスト構造主義に関しては、ドゥルーズの思想が考察され、特に彼がカントの崇高論に見出した「不協和な協和」が注目される。これは論者が重視する「異交通」、および「過剰性」の理論的モデルになるからであり、この視点から『差異と反復』、ベーコン論が、非還元主義的な、多様な差異の間の横断の理論として解釈される（第5章）。

ポストモダンについては、論者は諸論を検討した上で、J-F・リオタールとエーコを取り上げる。リオタールが未来の予測不能性の視点から現代崇高論を展開した点、エーコが過去との積極的な「異交通」の可能性を、「引用」の視点から論じる点が評価される（第6章）。次いで現代芸術の「実験」が、近代の直線的進歩ではなく、過去との横断的交通、引用になっており、これが「トランスアヴァンギャルド」として理解されるべきこと、また諸感覚や諸メディア、さらには過去との横断的交通を試みる現代アートを「トランスアート」として積極的に評価すべきことが提案される（7、8章）。「トランスエステティーク」とは、このような「異交通」を擁護する理論である。

本論文は、1992年に出版され、その意味では公表後かなりの年月が経っている。しかし論者の提起する「交通論」は、論者がその後公にしたエーコ論、ドゥルーズ論、芸術批評とともに、今なおアクチュアルであり、若い研究者や芸術家に影響を与え続けている。また論者によるベルクソンやドゥルーズの思想の解釈では、そこに含まれるネガティブな側面は余り触れられていないため、この点が問題にされるかもしれない。しかし、過去の思想の積極的側面を取り上げ、それと現代との交通を図るという論者の方法は、一つの解釈として正当性を有し、また論者が提案する横断的な思考である「トランスエステティーク」の実践として理解されるべきであろう。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2006年2月21日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。